

有限会社 遠藤正商店

(えんどうただししょうてん)

会社概要

- ・所在地 福島県会津若松市
- ・業種 漆器製造業
- ・資本金 1,000万円
- ・設立 1953年4月
- ・従業員数 4人
- ・URL <http://www.aizu1.com/endou/>
<http://bitowa-from-aizu.jp/japanese/top.html>

1 伝統工芸に現代の美を融合

同社は、「旬」の天然素材に職人が命を吹き込み、愛着の逸品を生み出す会津塗メーカーである。東洋の原点とも言える漆と木のぬくもりを生かし、使えば使うほどなじむ漆器を製造している。

遠藤典宏社長(50歳)は、2006年、会津漆器協同組合の有志を集め、ブランド「BITOWA」を生み出した。これは、四百数十年継承してきた会津塗の工法に現代の美意識やライフスタイルをデザインとして融合させたものである。ブランド名「BITOWA」には、本物の美を追求する職人の志を示す「美とは」と、美しさと日本の和を表す「美と和」の二つの意味が込められている。

2 海外展開のきっかけは後継者不足

新ブランド立ち上げは、会津塗の後継者不足がきっかけであった。漆器業界全体の業者数は減少傾向にあり、会津塗の生産量も最盛期の4分の1にまで落ち込んでいた。職人の優れた技術を生かす場がこれ以上乏しくなれば、職人を目指す人材が先細りしてしまうという危機感があった。

このような状況において、遠藤社長は「漆器の可能性を広げたい」という強い信念のもと、海外に活躍のフィールドを求めた。アイデアを商品化する前に中小企業庁が実施するJAPANブランド支援事業(助成金)に申請し、事業としての基盤を作ることから始めた。加えて、中国進出時には、現地企業との販売ルート構築するため、日本貿易振興機構(ジェトロ)が上海で開いた商談会に参加した。

これらの取組が奏功し、現在、「BITOWA」のジュエリーボックスやサイドテーブル、化粧水ディスペンサーといった50を超える幅広いアイテムが現地で好評を博している。なかには、ピンクやブルーといったこれまでの伝統工芸にはない、斬新



オーダーメイドで製造されたテレビボード



シックな色合いの化粧水ディスペンサー



ブルーが鮮やかな容器

で鮮やかな色使いの容器もある。ドレッサーやテレビボードなどは、オーダーメイドで製造している。

3 創意工夫を凝らした作業工程

「BITOWA」では、チェストやベッド、テレビボードなど、従来の会津塗では取り扱わなかった大型家具の製造も開始。製造工程で技術的に困難なものもあったが、納得いくまで何度も挑戦を重ねた。漆器製造に関わる工程は複雑で分業体制が築かれているが、複数の作業を一箇所を担当するなど工夫を凝らした。また、多治見の磁器に会津塗の装飾を施すなど、異素材とのコラボレーションにも挑戦している。

「BITOWA」ブランドは、2006年にフランスでデビューして以降、パリで開催される国際見本市「メゾン・エ・オブジェ」に2012年まで毎年出展。ドイツ、フランス、中国の各地では代理店を経由して販売している。最近では北米を重点地域と位置付け、ニューヨークでの展示会に出展するなど、積極的に海外での販売を行っている。世界を「WOW(ワオッ!)」と言わせる未来型工芸品の展示会「ジャパン・ネクスト・エキジビション:フューチャー・トラディションWOW」にも出展した。これは、経済産業省が推奨する「クール・ジャパン」事業の一環で、ニューヨークやパリで開催されたものである。

展示会の出展費用等は日本公庫から調達し、現地での幅広い活動に役立てている。

4 若手職人に「夢」を

現在の目標について、遠藤社長は「世界で新しい市場を発掘することです。ほとんどの日本製品はクオリティーが高いと評価されていますが、今後は価格面で受け入れてくれる市場を見つけてこなくてははいけません。漆という素材が何なのかも含めて、新しい価値観を兼ね備えた『BITOWA』を世界に積極的に発信していきたいですね。このような我々の取組を見て、若い職人たちにも『夢』を感じてほしいです」と熱く語る。

伝統工芸品の製造現場において後継者不足は全国共通の課題と言ってもよいが、「BITOWA」は、各方面の英知を結集し、海外に新しい市場を求めることにより、現状を打破しようとしている。脈々と流れ打つ職人の魂を礎にしたこの新たな挑戦に、多くの人が惹き付けられることを期待したい。